



In Memory of  
Dr. J. H. Stape  
1949-2016

ステイプ先生の思い出

初期の研究会メンバーによるエッセイ

## 先生の笑顔

奥田洋子

1994年の夏ごろだっただろうか、見ず知らずの外国人から電話をもらった。日本女子大学の客員教授で、英国の学会の参加者名簿で私の電話番号を見付けて電話したという。

吉祥寺駅の改札口で待っていたのは、背が高くやせた、アメリカ人というよりはむしろ典型的なイギリス紳士風の人だった。ただひとつ違っていたのはその口元で、イギリス紳士独特の感情を押し殺したような口元ではなく、口角の上がった楽しそうな笑みを浮かべた口元だった。蕎麦が食べたいという先生の希望で神田のまつやの出店に行った。紅白の鳴門巻きを指さして嬉しそうに「これ大好きです」と言うので思わず笑ってしまった。

その日から四半世紀にわたるお付き合いが始まった。新宿御苑からの風が吹いて来る先生の大学の宿舎で *Conrad Gathering* と称して *afternoon tea* 付き読書会が定期的に開かれるようになり、これが後のコンラッド研究会、そして日本コンラッド協会に発展した。東京で教えていた間は私の母に招待されて東京アメリカンクラブのバイキングにもたびたびいらして、母の友人などとも片言の日本語でおしゃべりを楽しんでいらしかった。

個人的には研究上大変お世話になった。幾度か論文を添削して頂いたほか、“*The Duel*”論を書くにあたっては、この作品としては珍しく心理描写に着目するというヒントをいただき、タイトルまで付けてもらった。コンラッドの全集の編集、批評や伝記などをとおしてモダニズム作家を専攻する学者の間ではよく知られた存在であり、たまに文芸誌などへの投書からは先生の秘めた激しい気性が窺えることもあったが、個人的には常に穏やかで終始笑みを浮かべていらしたように思われる。

だが、何と言っても先生との思い出の中で一番記憶に新しく、深い尊敬の念を呼び起こすのは先生がカナダにいらした晩年の数年間のメールや電話をとおしてのお付き合いである。話題は季節の移ろい、趣味の音楽、先生が“*the cutest puppy in the world*”と呼んでいらしたペットの *Brodie* のことから、学会の読み原稿の実際的な目安（25分としてダブルスペースで10枚から12枚くらい。引用は声調を変えて前にポーズを置くなどするか指でジェスチャーする）やシンポジウムのあり方（参加者ひとりひとりの発

## エッセイ

表はその後に続くディスカッションのための準備に過ぎない) というようなことまで詳しく教えてくださった。

中でも忘れられないのは、亡くなる前年の 11 月にいただいたメールの中の次の言葉である。

The new medication will hold the final stage off for only a short while yet, and I am being realistic about the time remaining to me. I just want it to be as pain free and as full of happiness as it can. I've had a good life, on the whole, and letting go of it is something I should hope to do with dignity and grace, or at least as much as can be mustered.

初対面のときの先生の楽しそうな笑顔を思い起こさせる最後のメッセージだった。

(おくだ ようこ 跡見学園女子大学 教授)

